

平成 29 年度第 1 回
我孫子市いじめ防止対策委員会

日 時 平成 29 年 6 月 9 日（金曜日）
午後 3 時 00 分～午後 4 時 30 分

場 所 我孫子市教育委員会 大会議室

平成29年度 第1回いじめ防止対策委員会

平成29年6月9日（金）
我孫子市教育委員会大会議室
15：00～

- 1 開会（倉部議長）
- 2 会議の公開について …（横山センター長）
 - ・傍聴の諸注意
- 3 我孫子市いじめ防止対策委員会の設置について…（横山センター長）
 - ・「いじめ防止対策委員会」設置要綱についての確認
- 4 新役員の紹介（自己紹介）
- 5 いじめ防止対策についての取組み

○議長：始めに設置要綱の第6条（調査部会）についての確認

重大事態に係わる調査に村田委員・櫻井委員・佐藤哲委員・久米委員の4名。

代表 佐藤委員（28年度第3回いじめ防止対策委員会で確認済）

（1）昨年度の「いじめアンケート集計結果」と「今年度の取組み」（横山センター長）

*平成28年度第2回いじめアンケート集計結果についての報告。

いじめについての設問を12問、インターネット上の実態把握設問を3問実施。

[認知数の推移について]

- ・小学生の率が高く、中学生の率が低くなっている。平成27年度の6月から増加してきたが、昨年度2回目の結果では小学校では7.8%から6.6%に、中学校では1.6%から0.9%に減少した。中学校では平成23年度からでは一番少ないという結果になった。
- ・同じ年度で見ると6月が高く11月で低くなるという傾向がある。2学期になると学級が成熟し仲間同士の解決力も高まってくる。1年間のスパンの中で、集団の成長が認知率を左右していることがわかる。
- ・学年別に見ると、小学校では2・3・4年生がいじめられていると多く回答した。多くなっている理由として、すぐに謝って解決するような内容、軽微なものが含まれていることがあげられる。
- ・文科省の調査では、中1の認知率が多いのに我孫子市が少ないのは、「小中一貫教育」を推進しているからではないかとの意見が、「いじめ問題対策連絡協議会…5/25」で出された。

[スマートフォンの利用に関して]

- ・小中学校とも所持率が増加している。小学校では約半数の児童が、中学校では約7割の生徒が持っている。

[課題として]

- ・小中ともに、困った時に相談する相手として「先生」が選択される割合が低いこと、さらに「誰にも相談していない」という2点は大きな課題である。

- ・「いじめを見た時どうしていますか？」の回答において小学校では「やめるように言っている」が多い。中学校では「黙ってみている」等の割合も多い。「黙ってみていることもいじめをしていることになる」という認識をもたせることが急務である。決して、傍観者にならないよう呼びかけていく。
- ・教師が子どものよいところを認め・励ますことで、さらに信頼関係を築き、いじめを受けた時何でも話せるような人間関係づくりを推奨していきたい。
- ・「いじめはどんな理由があってもいけないこと」の認識率は100%を目指したい。

(2) [28年度の各学校の取組み] (横山センター長)

- ・道徳教育の充実や、学年集会・全校集会での指導、生命の大切さの指導、他学年との交流などを通し、思いやりの心を学んでいる。また、教育相談の充実や学校独自のいじめアンケートの実施、教職員の研修の充実等に取り組んだ。

【今年度の取組み】

- ・教師からの情報発信と指導だけでは、目の届かない所で起こるいじめは無くならない。子どもたちが主体的に動き、発信することで、意識が高まっていくと考える。「自分たちで何ができるか」という活動を広げていきたい。
- ・8月3日に「中学生と教育委員との懇談会」が実施されるが、各中学校の代表が集まるので、その中で「いじめをなくすためにできること」を提示し、主体的に取り組んでいこうとする意欲を持たせるきっかけの場としたい。

(3) 「Q-U検査」を基にした取組みについて (横山センター長)

- ・【楽しい学校生活を送るためのアンケート】は平成23年度から年2回実施している。学級経営に生かすことはもちろん、不登校対策、いじめの早期発見等に活用しており、Q-U検査を活用するための教員の研修会を実施した。
- ・担当指導主事が各校に出向き、「要支援」判定の子どもを中心に、聞き取り・観察して把握・対応した。
- ・今年度の取組みについては、昨年度の取組みに加え、過去の検査結果も活用し、より丁寧に子どもたちを見守りたいと考えている。

(4) 情報モラル教育について (横山センター長)

- ・平成27年度より、小学校1年生から中学校3年生まで、段階的・主体的に学べるよう「情報モラル教育のモデルカリキュラム表」を作成・発信した。
- ・今年度も生徒指導主任研修会を中心に発信していきたい。

○議長：Q-U検査については、いじめ対策に活用しているところだが、過去のデータも活用してより丁寧に対応することや、情報モラル教育では、携帯・ネットをどのようにつきあっていくかの取組みが大切だと考えている。

(5) 「昨年度の検討事項」(横山センター長)

- ・「いじめられている子が発信している無言のサイン」「いじめている子が発信している無言のサイン」のチェック表を活用する予定である。子どもの一番近くにいる保護者も巻き込んで指導にあたりたい。
定期的実施することで、効果は上がってくると考える。
- ・今年度のめあてとして、【子どもの異変にいち早く気づけるよう、教師も保護者もアンテナを高くして指導にあたっていく】ことをあげている。

(6) 「いじめ防止対策全般の取組み」

- ・「我孫子市いじめ防止基本方針」概要版を作成し、ホームページに載せてある。たくさんの人に、子ども達を見守って欲しいと考えている。
- ・いじめアンケートについては、6月と11月に実施・集計する。またQ-U検査も実施する。
6月には、新たにスタートした学級生活の中で、いじめ問題を把握しいじめの早期発見・即時対応していく。また11月では諸活動を積み重ねてきた生活での新たな課題を把握して、アンケート後の教育相談を効果的に行い、いじめの解消や3学期の学級作りに生かしていく。
- ・担当指導主事が、5月、6月に市内19の全校を訪問し、直接話を聞き取ったり、子ども達の観察を行ったりして、学校と連携していじめ防止・解消に取り組んでいる。

○議長：家庭に対しての「アンケート」や「いじめのサイン」を、どのように生かしていくのか補足説明してください。

(センター長)：保護者が気づいた子どもの悩みをすぐに学校に連絡し、校内いじめ対策委員会で対応していくことが早期の解消につながっていくと考える。学校の実態にあわせて活用して欲しい。

○議長：いじめは、気づきにくい面を持っているので、「いじめのサイン」等の活用を通して、いかに気づくかが大切だと考える。そして、周囲の多くの人間が共有していくことが大切だと思う。また、昨年度からいじめに特化した指導主事が、学校訪問をして気になる子の把握に努めていく。学校と直接話をして、いじめ予防や解消に向けて取り組むことを行っているが、成果を出していけると良いと思う。

6 意見交換

○議長：本日傍聴人として教育委員さんが見えている。今年度、教育委員さんと子ども達と直接接点を持ち、色々な話題を意見交換する機会を設定する予定である。その中で、「いじめ問題」も話題の一つとして取り上げ、子ども達の立場からの意見を聞きたいと考えている。では、各委員さんから、我孫子市に限らず全国的な問題も含めて、ご意見をいただきたいと思う。

*村田委員：教育委員と子どもの意見交換は、いじめ問題を柱として考えているのか？

○議長：いじめ問題に限らず、幅広く学校の日常生活での話題を取り上げていきたい。また、「子ども議会」とは違った形で進められたらと考えている。

*村田委員：子どもに直接話を聞く機会があることは、良いことだと思う。

*櫻井委員：ある学校で、4年生くらいの4名の女子が下校途中、小さな子が皆のランドセルを持っていた。もしかしたら「いじめではないか？」と思った。軽いことからいじめに発

展していくので、地域の大人の声かけが必要だと思った。

- 議長： 気がついた大人が、なかなか注意しない。「いじめではないか？」の声かけが必要だと思う。反面、親によっては、「挨拶しなくていい」「知らない人に近づかない」と教えていることもあるが、学校では、挨拶の必要性は指導するし、人との交流の大切さも指導する。現実の課題はいろいろ有ると思う。
- *佐藤委員： いじめの線引きが今と昔では違ってきたように思う。定義として、「本人が苦痛を感じている」とあり、外部はなかなか関わりにくい。多くの人で関わっていただけいいと思う。大人がわからない部分もあるので、子どもが見て見ぬ振りをしない。子ども同士で判断し合うといい。「いじめのサイン」を子どもが十分理解できたらいいと思うし、学年によっても理解が違うと思うので、学年に応じて誰でもわかる「サインチェック表」があるといいと思う。周囲の者が通告できる流れがあると良い。
- *センター長： いじめの訴えについては、自分が次の被害者になる恐れなどもあるので、全て報告できない。柏市の携帯アプリでの訴えも一つの方法であり、ペーパーで訴えるのも一つの方法であると考え。
- 議長： より活用しやすいチェック表を、事務局で検討して欲しい。
- *久米委員： こども達が主体的に行動することはいいなと思う。埼玉では「子ども会議」というのが有り、いじめに特化して、子ども達による会議を行っている。自分の次男に「いじめについて何が難しい？」と尋ねたら、「ふざけなのかどうかの区別がわからない」と答えた。「カバンを持たされているのか？遊びなのか？」自分の地域では、朝・帰りの時間帯に「見守り隊」が組織されている。そういう地域の活動も大切だと思う。通学路で、一人でカバンを持っている光景があったが、「どう思う？」と子どもに考えさせることが大切ではないか。
- 議長： 道徳の授業が新たな形で展開されるが、道徳資料の中に「いじめの傍観者」に焦点を当てたものがあった。こういう資料をどう活用するのかが、大切になってくると思う。「どう思うか？」の投げかけは重要である。
- *久米委員： 学校から児童相談所に相談が入る場合、養護教諭からの相談が多い。子どもと担任が上手くいっていない場合などである。学校では担任と養護教諭の密な連携が必要だと思う。
- *川瀬委員： 何がいじめなのかの判断は難しいのでは？ 大人としての判断をして、指導しているが、自分たちで判断していければと思う。アンケートについて、「先生に相談」が少ない現状がある。アンケートをとったところで、どこまで反映されるのか疑問である。子ども達から見て先生と呼ばれる大人は、まずは一緒に活動して、給食を一緒に食べることが大切だと思う。アンケート結果は、内容（数字等）を吟味し、取捨選択して対応して欲しい。
- 議長： 数字のとらえ方は難しい。認知数が多いからダメなのか…。少ないからいいのか…。アンケートやQ-U検査で、いじめに気づき、子どもと接していく中で、本当のいじめに対応できればと思う。
- *川瀬委員： 「いじめのサイン」が家庭で、いじめ判断の参考になれば良いと思う。ホームページにアップするなどして、保護者が活用できればと思う。

***栗原委員**：Q-U検査を初めて知った。いじめは、先生が見ていない時間で発生しているが、教育委員の活動等、大人が入っていくことが大切だと思う。

***稲村委員**：アンケートについて、アンケートで拾える子（いじめを確認できる）が多々いるので学校としては役立っている。もちろん学校生活を見ていて発見できる子もいる。個人的に相談に来る子は少ないがアンケートからわかることも多い。また、状況に応じて、独自のアンケートから迫ることもある。アンケートであがってきたら、周囲からの情報を集めて対応したり、時には同時に保護者にも連絡を取り、相談したりすることも積極的に行っている。Q-U検査は、「人との関わり方」に焦点を当てて活用している。養護教諭の話があったが、各校で、生徒指導的な組織に必ず入っている。アンケート・Q-U検査・子ども相談課からの情報なども活用をしている。いじめの対応は、「目を多くする」ことが重要である。

○議長：いじめの対応については、まず担任がというのが基本であるが、不足している部分をアンケートや周囲からの情報、家庭や外部からの情報等で補い、対応していくことが大切だと思う。

***斉藤委員**：4月から学習支援事業「マナビトラぼ」を始めている。中には不登校の子も参加しており、今後、居場所としても活用して欲しいと考えている。家庭的にいろいろな問題を持っている子がいるが、貧困がいじめに繋がらなければいいと思う。

***三澤委員**：「いじめのサイン」については、学校でのいじめを家庭で出すことも十分考えられる。小学生と中学生では言葉の理解の仕方が違ってくると思うので、より効果的に活用するためにも、学年に応じた内容を工夫することが大切ではないか。そして、親が察知する（見つける・聞き出す）努力をしていくことが大切だと思う。「親が見つけるポイント」をより実効的な内容にしていけると良いと思う。虐待などの危険のある家庭などには、子ども相談課など他の力を入れていくことが大切だと思う。「いじめゼロにどれだけ近づけるか」を常に意識したい。

***小島委員**：昔と今のいじめのとらえ方の違いはあるが、アンケートやQ-U検査等は重要なツールだと思う。子どもの出しているサインを見逃さずに対応することが大切であり、多くの目で見守りたい。

○議長：今後の予定について、事務局お願いします。

7 その他

8 諸連絡（横山センター長）

- ・ 次回は、10月20日（金）15：00～ 市教委大会議室
- ・ 3回目は、2月20日（火）15：00～ 市教委大会議室

9. 閉会